

There 構文と be の特質について

西原俊明・西原真弓

On there-construction and be

Toshiaki NISHIHARA・Mayumi NISHIHARA

キーワード：there-挿入、小節、繰り上げ、格付与、非対格動詞

0. 序

(1) There is a man in the room.

最近の生成文法研究では、(1)における There 構文に関して、主語である名詞句を be の直後に移動し、空の主語の位置に there を挿入するという操作をやめ、論理的な主語である名詞句は be に後続する位置に基底生成されるとする考え方が一般的になってきた。¹この考え方には、少なくとも次の二つの分析が存在する。一つは、Stowell (1978) や Burzio (1981, 1986) に見られるように、論理的な主語である名詞句と後続する要素が D-構造において小節 (Small Clause) をなし、論理的な主語である名詞句が主語の位置に移動されない場合に there が挿入されるとみる分析である。この分析を Arimoto (1989) にしたがって RAB 分析と呼ぶ。もう一つは、Arimoto (1989) のように、論理的な主語である名詞句と後続する要素は D-構造において小節をなさないとする分析である。本稿では、両者の立場を概観し、Arimoto の分析を再検討する。また、RAB 分析にとって問題になると Arimoto が指摘した事実も問題にならないことを指摘する。さらに、Lasnik (1992) で指摘された be の特質と There 構文についてふれることにする。²

1. RAB 分析

ここでは、Stowell (1978)、Burzio (1986) で提案されている RAB 分析をみる。RAB 分析では、(1) は D-構造において (2a) の構造をもつと考えられている。

(2) a. [e is [sc a man in the room]]

- b. A man is in the room.
- c. There is a man in the room.

拡大投射原理 (Extended Projection Principle) にしたがって、(2a)に名詞句の移動が適用されると(2b)が派生される。他方、名詞句の移動が適用されなければthereが挿入されて(2c)が派生される。Arimotoによれば、このRAB分析には次のような問題点が存在する。まず、Milsark (1974) が指摘したThereと論理主語との間には二つ以上のbeが存在してはいけないという事実に関わる問題点が挙げられる。

- (3) a. There was a man being arrested.
- b. *There was being a man arrested.

(4) e_1 was [sc e_2 being [sc e_3 [VP arrested a man]]]

RAB分析では、(3)のD-構造は、(4)であり、a manが e_3 を経て e_2 へ移動した後、there-挿入が適用されて(3a)が派生される。一方、問題の名詞句が e_3 へ移動したあとに e_2 への移動が適用されず、この時点でthere-挿入がなされた場合に(3b)が派生される。Stowell (1978) は、制約(5)によって(3a)(3b)の許容性の差が説明できると議論している。

- (5) 基底生成されたNPは、S-構造において語彙要素あるいは痕跡によって満たされていないなければならない。

(3a)の派生の場合、a manが e_3 を経由して e_2 へ移動するので小節内のNPの位置は、a manの痕跡と語彙要素であるa manによって占められており、(5)を満たしている。他方、(3b)の派生では、小節内の空のNP位置にある e_2 が語彙要素によっても痕跡によっても占められておらず、(5)に違反しているために非文となる。

Arimotoは、この分析には理論上問題が残ると指摘している。(4)において、a manが e_3 へ移動し、thereが e_2 に挿入されて e_1 へ移動したとするとこの派生は(5)の違反とはならない。 e_3 の位置には移動した語彙要素であるa manが存在するし、 e_2 の位置はthereの痕跡によって占められているので(5)を満たしていることになる。したがって、(5)からは誤って適格であると予測されることになる。この派生を正しく排除するためには、Burzio (1981) で提案された(6)を仮定しなければならない。

(6) There は、小節には挿入されない。

Arimoto は、(5)(6) を仮定して(3b) を排除したとしても RAB 分析をとる場合、(7) を正しく予測できないと指摘している。

(7) a. *I consider there likely to be further violence.

b. I consider [sc [NP e] [AP likely [s there to be further violence]]]

(7a) は、(7b) の D-構造において、S 内の主語の位置に there が挿入され、その後 e の位置へ移動し派生されると考えられる。小節内の空の NP 位置は、S-構造において there によって占められ、(5)(6) に違反していないので許されると予測される。しかし、この予測は事実と矛盾する。

RAB 分析には、上で見たような問題が存在するので好ましくないとするのが Arimoto の主張である。

2. Arimoto (1989) の分析

2 節では、RAB 分析をとらないほうがより多くの言語事実を説明できると主張する Arimoto (1989) の分析を考察し、その問題点を指摘したい。

Arimoto は、There 構文に関して RAB 分析をとらなければ、There 構文に課せられる制約として(8)を仮定することで(9)-(10)の例を説明できるとしている。³

(8) There もその痕跡も S-構造において小節の主語の位置に生じることはできない。

(9) (= 7) *I consider there likely to be further violence.

(10) *I want there being a man on guard. (Arimoto 1989:114)

これまでの研究から(9)(10)において動詞に後続する補部は小節を形成すると分析されている。制約(8)が与えられると、小節を補部としてとる動詞 want や consider の補部の主語の位置には there が生じえなくなり(9)(10)の非文法性を正しく説明できる。

さらに、Arimoto は、RAB 分析では議論されていない進行形の be (progressive be) と連結詞としての be (copula) を区別することを提案し、この区別と制約(8)により、別の事実が説明できると主張している。Arimoto は、進行形の be は文レベルの節にしか生じないのに対し、連結詞としての be は、文レベルの節にも小節にも

生じると分析している。この分析にしたがうと、(11)からわかるように、知覚動詞の補文は小節をなしているということになる。⁴ 知覚動詞の補文が小節をなしているのであれば、その補文には制約(8)によって *there* が生じないことが予測される。これは、(12)から支持される。

(11) a. *I saw him be running down the street. (Arimoto 1989: 118)

b. We saw John be polite for the first time. (Arimoto 1989: 119)

(12) a. *I saw there be many complaints from students.

(Arimoto 1989: 119)

b. *I saw there arrive three girls. (Burzio 1986: 295)

Arimoto の分析では、R A B 分析の問題点をうまくとらえているように思えるが、いくつかの問題点が残されている。まず、文法的に正しいとみなされている(13)が存在することから(8)を小節に関わる制約とはみなすことができないように思われる。

(13) We consider there likely to be a man in the room.

(Lasnik 1992: 384)

また、小節の主語に *there* が生じないことを規定する制約(8)では、次に示す ECM 構文の例の文法性の差を説明することはできない。

(14) a. * I believe there to be usually a solution.

b. ?I believe there usually to be a solution.

さらに、*There* 構文の論理的主語とそれに後続する要素が小節をなすという RAB 分析をとらなければ、Safir (1987) で議論された小節分析を支持する例や Lasnik (1992) で指摘されている次の例の文法性の差をどのように説明するのかという問題が残る。

(15) a. There are many fish in the lake.

b. In which lake are there many fish ?

- (16) a. I discussed many fish in the lake.
 b. *In which lake did you discuss many fish?

(16a)における many fish in the lake は、典型的な名詞句であり、この名詞句内から前置詞句を抜き出すことは阻止される。一方、(15a)からの前置詞句の抜き出しは(15b)からわかるように許される。(15)は、(17)から小節と同じふるまいを示すことがわかる。RAB分析をとると(15)における many fish in the lake も小節をなしていることになり、(15)と(17)の平行性を問題なく説明することができるが、Arimotoの分析では(15)(16)の許容性の差異は問題として残る。

- (17) a. I want [sc some fish in the lake].
 b. In which lake do you want some fish?

先に見たように、Arimotoは知覚動詞の補文を小節として分析している。知覚動詞の補文を小節として分析し、制約(8)によってthereは生じえないとすると(18)の例もまた問題となる。

- (18) a. I've never seen there be anyone executed here without being given
 a chance to confess first.
 b. I saw there arise revolts everywhere in the country.

ここでは、Arimotoの分析を概観した。また、いろいろな言語事実をみるとArimotoの分析にも問題点が残ることを指摘した。次節において代案を考えてみたい。

3. 代 案

2節において、言語事実を詳しくみるとArimotoの分析には問題が残ることを指摘した。ここでは、ArimotoがRAB分析にとって問題とした例もRAB分析を維持したまま解決できることをみる。

まず、1節で議論した(3b)の非文法性を結果的に生じさせる二つの派生は、RAB分析を採用し、制約(5)(6)を仮定することによって排除できるものとする。残された問題は、制約(5)(6)による説明ではとらえられないとArimotoが主張した(7a)の非文法性である。(7a)と同じ派生経過をたどる(13)が文法的であることから、(5)(6)の制約は維持できるものと思われる。(13)では、thereがlikelyの補文の主語

の位置から NPe の位置へ移動されて派生されたと考えられる。

(19) (=13) I consider there likely to be a man in the room.

I consider [sc [NP e] [AP likely [s there to be a man in the room]]].

したがって、(7)の非文法性は、派生上の制約によるものではなく別のところにその理由が求められると思われる。⁵

(20) (=10) *I want there being a man on guard. (Arimoto 1989: 114)

また、制約(6)を仮定することによって(20) (=10) の非文法性はとらえられる。(20) は、(19)のように、there がさらに埋め込まれた節内に挿入され、その後で移動が適用されたとは考えられない。小節の主語の位置に挿入されていると考えられ、制約(6)の違反を引き起こし非文となると考えられる。

次に、(15)の例であるが、この例は R A B 分析を採用すれば問題にならない。(16a)における many fish in the lake が名詞句であるのに対し、(15a)におけるそれは小節をなしていると考えられ、小節との平行性はうまくとらえられる。

(21) (=15) a. There are many fish in the lake.

b. In which lake are there many fish ?

(22) (=17) a. I want [sc some fish in the lake].

b. In which lake do you want some fish ?

ではここで、Arimoto の分析で問題となった知覚動詞の補文内に there が生じている(12)(18)のコントラストを見てみよう。これらの例の許容性の差異を考える前に、知覚動詞の補文が小節を形成していないことを確認しておく必要がある。もし、知覚動詞の補文が小節であるならば、制約(6)によって there が生じることはできないことになる。いろいろな統語テストによる知覚動詞の補文と E C M 補文の平行性から知覚動詞の補文は I P を形成しているといえる。(23)における統語テストは、I P 節点が存在するかどうかをみるものである。文副詞、主語指向の二次述語は、これまでの研究から I P に姉妹付加されていると考えられている。一方、主語からの外置は、すぐ上の最大投射範疇に付加されると仮定されている。Nakajima (1991) では、小節は Agr Phrase を形成し、Agr Phrase は項であるから Agr Phrase への付

加は阻止されるとみている。これらの仮定にしたがうと主語からの外置が可能であるから、知覚動詞の補文は Agr Phrase ではないことになる。したがって、小節をなしていないということになる。IP を形成していると考えれば、IP は項ではないので主語からの外置の例もうまく説明できる。他の事実も IP 分析を支持するものである。

- (23) a. ?I found people t to be fascinating who had tons of money when I was still a child.
- b. ?I saw the king leaving the country who was banished by thousands of the reformers yesterday. (Extraposition from Subject)
- c. John considers Mary probably to be scared of snakes—certainly, she is scared of snakes.
- d. I saw the children probably touch the cat's tail. (Sentential adverbs)
- e. I expect many members to be present sober.
- f. Which community have you seen a member of t walk naked in the park? (Subject-oriented predicates)

では、(12)(18)の差異が何によるものかを考えることにする。先ず、there 構文の特徴、とりわけ there 構文がどのような種類の動詞にみられるものなのか見ておこう。

- (24) a. *I saw there be many complaints from students. (Arimoto 1989: 119)
- b. *I saw there arrive three girls. (Burzio 1986: 295)
- c. I've never seen there be anyone executed here without being given a chance to confess first.
- d. I saw there arise revolts everywhere in the country.
- (25) a. There is a man in the room.
- b. There arose revolts everywhere in the country.
- c. There were believed to be lions in the forest.
- d. There were lions believed to be in the forest.

There 構文は(25)の例からわかるように、be、非対格動詞、受動形の動詞に見られるという特徴をもつ。これらの動詞に共通するものは、非対格動詞としての性質を兼

ね備えている点にある。これまでの研究によって、非対格動詞は外項をもたないと分析されている。受動形の場合も外項が抑えられていて外項をもたない。この事実から、(13)(18)の例は、there構文としての資格を有していることになる。言い換えれば、there構文としては問題がないことになる。それゆえに、(13)(18)の差は、知覚動詞の意味的特徴とthere補文の意味に求められると思われる。(24)の知覚動詞の補文の動詞が原形である原形不定詞(Bare infinitive)であることに注意したい。

(26) I saw the man cross the street.

(26)においては、「ある男性が道を横切るというプロセスを最初から最後まで目撃した」という意味を表し、補文の意味内容が出来事としてとらえられている。これに対し、(24a)では、補文は存在を表しており、ある事象のプロセスを表していないし、出来事を表しているとは言えない。また、(24b)におけるarriveは、プロセスに焦点はなく動作の完了点に焦点があり、知覚動詞の補文が表す意味内容に合致しない。これらの理由により、(24a)(24b)は許されないとされる。

最後に(14)のECM構文の例であるが、この例はLasnik(1992)の分析にしたがうものとみなし、4節において考察する。

4. be繰り上げとthere構文

ここでは、Lasnik(1992)の分析を考察する。Lasnik(1992)では、重要な言語事実の指摘とその事実をもとにしたいくつかの仮定がなされている。指摘されている重要な事実の一つは、項である名詞句と同様に虚辞のthereも格が付与されなければならないという事実である。このことは、次のことから支持される。⁶

- (27) a. *I tried [John to be here]
 b. *I tried [there to be a man here]
 c. *It seems [John to be here]
 d. *It seems [there to be a man here]

他方、Lasnik(1992)では、次の二つのことが仮定されている。一つは、beにChomsky(1986a)で仮定されているV-to-I繰り上げが適用されるという仮定である。ここでのbeの繰り上げは、Lasnik(1986)にしたがいInflがTenseを含んでいる場合とInflが空の場合に適用される。この条件に該当しない次の例は許されない。

- (28) a. *Be not noisy.
 b. *A car will be not here.
 c. *There will be usually a man here.

また、格を付与する要素と格を付与される要素との間に別の要素が介在する場合には、隣接性の違反の効果 (Case adjacency effect) が見られるが、これは be の繰り上げの可否の結果生じると Lasnik は分析している。

- (29) a. ?There usually arrives a bus (at this time).
 b. *There arrives usually a bus (at this time).
 c. *I believe there to be usually a man.
 d. *There will be usually a man here.
 e. There is usually a man in the room.

動詞 arrive は、be とは異なり繰り上げが適用されない。⁷ (29b) は、繰り上げが適用されない動詞に繰り上げを適用しているので許されない。(29c) もまた繰り上げが適用できない環境であるのに繰り上げを適用しているので許されない。(28) において指摘したように、不定形節には、繰り上げが適用されないからである。(29d) の場合は、will が存在するために繰り上げが阻止されるので非文となる。(29e) は、一見すると隣接性の違反の効果を示している。この文が適格になるのは、D-構造において be は a man の前の位置に存在し、そこから移動が適用されて (29e) のかたちになることに注意したい。be の痕跡が、移動した要素の統語的特徴をもつと考えると、この痕跡があとで見るように、a man に格を付与することになり許されることになる。

もう一つの仮定は、be が格付与能力をもつという仮定である。Lasnik は、Belletti (1988) の分析をふまえて be が付与できる格は部分格 (Partitive Case) であると主張している。be が部分格を付与するという主張は、部分格が付与される場合には定性効果 (definite effect) がみられることから支持される。Belletti は、イタリア語、英語における非対格動詞を分析し、非対格動詞は格を付与し、その格は部分格であるとの分析をしている。この非対格動詞には、定性効果が見られる。there 構文における be は非対格動詞と同じように定性効果を示すことから部分格を付与していると考えられる。

- (30) a. There arrived a man.
 b. *There arrived the man in the room.

- (31) a. There is a man in the room.
 b. *There is the man in the room.

これまでに見た Lasnik の仮定をまとめると次のようになる。

- (32) a. There、NP はともに格を付与されなければならない。
 b. be は、定形節の場合、助動詞相当語句がない場合に繰り上げが適用される。
 c. be は、部分格を付与できる。

(32)の仮定をふまえて、(14)を(33)として再度考えてみよう。

- (33)(=14) a. *I believe there to be usually a solution.
 b. ?I believe there usually to be a solution.

(33a)の例は、不定形節内では、beの繰り上げが阻止されるということから非文法性を説明できる。(33b)では、beに繰り上げが適用されておらず、a solutionに対してbeによって格が付与されているので許される。

Lasnikの仮定では、(34)の例の非文法性も正しく予測できる。(34a)の例では、動詞considerからthereに対しては格が付与されているが、a manには格付与をする要素がなく(32a)を満たしていないために非文となる。(34b)にも同様のことが言える。また、これらの例は、制約(6)の違反をも引き起こしている。

- (34) a. *We consider there a man in the room.
 b. *I want there someone here at 6:00.

5. 結語

There構文の論理的主語である名詞句と後続する要素は、小節をなすという仮定を採用してこの構文の特質をみた。また、この仮定をとらないArimotoの分析を概観し、様々な言語事実から問題点を明らかにした。さらに、知覚動詞とThere構文の関係をとらえ、thereが生じるかどうかは知覚動詞がとる補文の統語的範疇によるのではなく、意味に関わる要因であることを指摘した。There構文とともに現われるbeの特質についてもLasnik(1992)の分析をふまえて確認したことになる。

注

1. ここでは、次に示す Outside Verbal ES については議論しない。これらの例は、本文で取り上げる文とは統語的にも異なったふるまいを示すからである。
 - (1) There walked into the room a man with blond hair.
2. ここでの分析は、GB 理論の枠組で考えることとし、極小理論の枠組でどのようにとらえられるかは今後の研究にゆだねる。
3. Arimoto は、RAB 分析をとらなければ制約(8)によって(3b)の例も説明できるとしているが、どのような構造を与えるのかは説明されていない。
4. 西原(1993)で指摘したように、知覚動詞を小節と分析し、文レベルの要素が生じえないとすると文レベルに生じるとされる二次述語の例や重名詞句移動に関わる副詞の作用域が説明できなくなる。
 - (2) a. We saw watch our neighbors with a telescope the man in the apartment opposite ours. (Wasow) (personal communication)
 - b. I saw the man walk the street naked.
5. (7a)の非文法性は、派生上の制約によるものではないことは明らかであるが、その原因については今のところ明らかではない。次の例文との差異は、意味的なところに(7a)の非文法性を求めることができる可能性を示唆している。詳細については、今後の研究にゆだねる。
 - (3) ??I believe there likely to be further violence.
6. ここでの格付与は、次に示すように統率によって規定されるとする。

Case is assigned only under government by a Case assigner.
7. arrive は、be とは異なり、not の前の位置に移動することもできないし、主語との倒置など繰り上げの特徴を示さない。したがって、繰り上げが適用されない動詞であると言える。
 - (4) a. *There arrived not a bus.
 - b. *A bus arrived not.
 - c. *Arrived a bus. (Lasnik 1992 : 388)

REFERENCES

- AKMAJIAN, ADRIAN; SUSAN M. STEELE; and THOMAS WASOW. 1979.
The category of AUX in universal syntax. *LI* 10. 1-64.
- AKMAJIAN, ADRIAN, and THOMAS WASOW. 1975. The constituent structure of VP and AUX and the position of the verb BE. *LA* 1. 205-45.
- AOUN, JOSEPH. 1985. *The grammar of anaphora*. Cambridge, MA : MIT Press.
- ARIMOTO, MASATAKE. 1988. Eigo jodoushi no kouzou. *Eibungaku Kenkyu*. 64. 245-63.
- __. 1989 a. Jougo Youso no bunpu to hobun kouzou. *Eibungaku Kenkyu*. 66. 65-80.
- __. 1989 b. Against the raising analysis of be. *EL* 6. 111-129.
- BAKER, MARK; KYLE JOHNSON; and IAN ROBERTS. 1989. Passive arguments raised. *LI* 20. 219-51.
- BALTIN, MARK. 1978. Toward a theory of movement rules. MIT dissertation.
- BELLETTI, ADRIANA. 1988. The case of unaccusatives. *LI* 19. 1-34.
- BURZIO, LUIGI. 1981. Intransitive verbs and Italian auxiliaries. MIT dissertation.
- __. 1986. *Italian syntax: A government-binding approach*. Dordrecht : Reidel.
- CHOMSKY, NOAM. 1981. *Lectures on government and binding*. Cambridge, MA : MIT Press.
- __. 1986 a. *Knowledge of language: Its nature, origin, and use*. New York: Praeger.
- __. 1986 b. *Barriers*. Cambridge, MA : MIT Press.
- __. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, MA : MIT Press
- DAVIS, LORI Jo. 1984. Arguments and expletives : Thematic and nonthematic noun phrases. University of Connecticut dissertation.
- DECLERK, RENAAT. 1982. The triple origin of participial perception verb complements. *LA* 10. 1-26.
- __. 1984. The structure of infinitival perception verb complements in a transformational grammar. in LILIANE TASMOWSKI and DOMINIQUE WILLEMS, eds., *Problems in Syntax*. 105-128.
- GERON, JACQUELINE. 1980. On the syntax and semantics of PP extraposition. *LI* 11. 637-678.

- HIGGINBOTHAM, JAMES. 1983. The logic of perceptual reports : An extensive alternatives to situation semantics. *The Journal of Philosophy* 80. 100–27.
- JACKENDOFF, RAY. 1972. *Semantic interpretation in generative grammars*. Cambridge, MA: MIT Press.
- . 1977. *X'—syntax: A study of phrase structure*. Cambridge, MA: MIT press.
- JOHNSON, KYLE. 1985. A case for movement. MIT Dissertation.
- . 1988. Clausal Gerunds, the ECP, and Government. *LI* 19. 583–609.
- LASNIK, HOWARD. 1992. Case and expletives : Notes toward a parametric account. *LI* 23. 381–405.
- LEVINE, ROBERT D. 1985. Right node (non –) raising. *LI* 16. 492–97.
- LOBECK, ANNE C. 1986. Syntactic constraints on VP ellipsis. University of Washington dissertation.
- LUMSDEN, MICHAEL. 1988. *Existential sentences: Their structure and meaning*. London : Croom Helm.
- MILSARK, GARY LEE. 1974. Existential sentences in English. MIT dissertation.
- NAKAJIMA, HEIZO. 1990. Secondary predication. *LR* 7. 275–309.
- . 1991 b. Reduced clauses and Argumenthood of AgrP. in HEIZO NAKAJIMA and SHIGEO TONOIKE eds., *Topics in Small Clauses*. 39–57. Tokyo : Kuroshio.
- NISHIHARA, TOSHIAKI. 1993. Chikaku doshi no hobun ni tsuite. paper presented at the 11th national conference of linguistic society of Japan.
- . 1995. Against bare infinitive complements as VP small clauses. Views from Liberal Arts. Nagasaki University. 383–395.
- POSTAL, PAUL M. 1974. *On raising: One rule of English grammar and its theoretical implications*. Cambridge, MA : MIT Press.
- ROTHSTEIN, SUSAN. 1983. The syntactic forms of predication. MIT Dissertation.
- SAFIR, KENNETH J. 1985. *Syntactic chains*. Cambridge : Cambridge University Press.
- SUZUKI, YUBUN. 1991. Small clauses as AgrP, in HEIZO NAKAJIMA and SHIGEO TONOIKE eds., *Topics in Small Clauses*. 27–37.
- STOWELL, TIMOTHY. 1978. What was there before there was there.

CLS 14. 458–71.

—. 1987. *As so, but no so so as*. ms., University of California.

Los Angeles.

TERAZU, NORIKO. 1979. A note on the derived structure of extraposition rules. *SEL* 7. 85–98.

WILLIAMS, EDWIN. 1983. Against small clauses. *LI* 14. 287–308.

—. 1984. There – insertion. *LI* 15. 131–53.